

印度の醫方及び藥物

——ヘルンレ圖書の解説として——

泉 芳 環

予が昨年ケムブリッジにて偶然發見せし故ヘルンレ教授の圖書約四百五十部七百五十冊の中に於て、殆んど其の六分の一を占めて居るものが醫方藥物に關するものである。今此に予は解説旁々少し印度の醫方及び藥物のことに就て叙べやう。

今を距つること三十年前、中央亞細亞から樺皮に認められた梵文の文書が發見された。其の研究は擧て當時カルカッタのマドラス學院の學長であつたヘルンレ教授に委ねられたのであつた。而してその結果それは非常に古いものであると

が斷定された。^(註一)從來法隆寺貝葉が世界最古のものであると云ふ聲譽を占有してゐたけれどもこの樺皮文書は更にそれよりずっと古いもので正に世界最古の梵文々書であることが決定せられ、發見者の名によつてパウエル文書と命名せられた。其の後學界は非常な興味と注意とを之らの文書に向けるやうになり、續いてイギリスからはオーレルスタイン、フランスからペリオ、ドイツからグリユンウエーデル、ロシアからベトロヴスキ、日本から大谷光瑞など云ふ人々の中央亞細亞の探險を成さしめ、幾多燼煌龜茲の文書遺品を發掘する導火線となつたのである。

ヘルンレ敎授の周到にして水も洩らさぬ研究の結果は凝つてあの浩瀚なパウエル文書考一部二卷に依て十分に窺知せられる。彼をして東洋學者として學界に名を成さしめたのも蓋し此パウエル文書に始まると云つて可い。學界の傾向を忽ちにして中央亞細亞へ、東方土耳其へと振ぢ向けた程の勢は全くすばらしいものである。

然るにこのパウエル文書に書かれてあるものを判讀して見ると多くは醫方藥物に關するものであつた。所で印度の醫方藥物等のは當時歐洲の學界に少しも知られてゐない。此に於てかヘルンレはこの誰一人未だ一指を染めざる醫方藥物の研究を印度の原典に就て始めたのである。

彼は一八九九年にカルカツタを去つてオツクスフォードへ移つた後も、ノースムア、ロードの閑寂な勉強室でこの研究を續けて居た。一方にスタインの發掘品中の古寫經梵文斷片を整理

する傍ら、古代印度の藥物研究の第一編骨オステオロジ學を一九〇七年に出版してゐる。一九一八年十一月十二日の未明に、七十八歳の高齡を以て歿したまで、彼の書齋には常に醫方藥物の研究が續けられてゐたことは想像するに難くない。

ドイツ生れの彼は四年に亘る大戦によつてかなりひどい壓迫をイギリスの環境から受けてゐたであらうと云ふことも想像される。彼のやうに純眞な研究を續けてゐるものになで、種々の壓迫が加へられると云ふことは、幾分止むを得ぬ點もあらうが、實に悲しい事だ。彼の歿する僅かに一箇月前に休戦となつたのはせめてもの慰籍であつたと云はねばなるまい。こんな事を考へてこのヘルンレ圖書に對すれば故人の倅も髣髴として現在するの感がある。予は讀者がこの一小編によつて多少ともこの方面の興味を喚起し、一層深くこの點に就て研究の歩を進めら

れんことを故人の名によつて希望する外に他意はない。これがこの一編の主意である。

二

印度は驚くべき國である。古代印度の文明はその獨創力に於て世界の孰れに對しても誇り得べき偉大なるものを有して居る。

天文學に於ては紀元前三千年の古代に於て、已に曆を定め、日月の蝕を始め、天體星宿の運行の現象は明かに記載されて居る。須彌天文など、一概に蔑視する勿れ。コールブルークに依れば歲差の考察に於てはプトレミーの天文よりも遙かに正確であるとのことである。

數學に於ても驚くべき進歩をしてゐる。十進法、微分、積分の發明、記數法、幾何學、三角術、ピタゴラスに與へられし聲譽は却て古代印度民族に歸せしむるが正當である。

音樂も亦大なる發達を遂げた。全音階の發明

は世界に於て印度が最初である。

建築は印度に於て其の美觀の極度に達して居ると云つても過言でない。圓頂閣あり、半球閣あり、尖塔あり。到る處に聳え立つ殿堂宮觀は沈黙の雄辯を以て千年の歴史を物語る。古代ギリシアの建築が様式に於て印度建築に影響して居ることも事實だらうが、ハンターの云ふ所によればアレキサンダー大王は印度建築の様式を母國に輸入せんがために技師を印度に残したと云ふことである。

文典はバーニニ等によりて辭典はアマラシンハ等によりて共にアリアの國語の分析に成功し、永く東洋學研究者のために軌範となつてゐる。

化學の智識に於ても印度民族は造詣決して淺くはない。硫酸、硝酸、鹽酸を處置し、又銅鐵鉛錫亜鉛等の酸化物、其他鹽化物、硝酸鹽、硫

酸鹽、炭酸鹽類を熟知しこれを使用した。

又戦法を攻究したる古典に(註三)ドルハヌ吠陀がある。武器を論じ、且つ歩兵、騎兵、戦車兵、象兵を記載して居る。

法典はマヌを始としてヤジュニヤヴルキヤバラーシャ等みな燦然として輝いて居る。

哲學に於ては世界孰れの國も印度古代の體系に追隨を許さぬ或ものがある。ヌヤーヤにせよ、ヴーイセイシカにせよ、サンクフヤにせよ、ヨーガにせよ、儀禮に於けるミーマーンサー、思索に於けるヴェーダーンタとし、孰れて東洋文化の花でないものがあらうか。

かくの如き文化の中に獨り醫術のみが進歩しないと云ふ道理は決して無い。

三

さて恠ういふ學問は大概みな吠陀と云ふ古典(註二)にその源を發するのである。吠陀には四種あつ

て、リグ、ヤジュル、サーマ、アトハルヴである。

然し醫方藥物のことは何處に根原を有するのかと云ふと、吠陀に對してウバ吠陀なるものがあることを知らねばならぬ。ウバ吠陀とは吠陀小典とでも云ふべきもので、亦四種(註三)ある。その中にアーユル吠陀と云ふのがある。これがリグ吠陀から出たもので醫方藥物に關することを記載して居る。或はアトハルヴ吠陀から出たとも云ふが、兎にかくこのアーユル吠陀が印度醫方藥物の根原なのである。

然しかく云ふても今このアーユル吠陀が全部具備して存在してゐると云ふわけではない。古典と云ふものは大概何れの國でもさうではあるが、印度はわけても歴史の觀念に乏しいので、古典に伴ふ傳説は神話の領域のものであるのを免れない。

先づ印度では世界の創造破壊に關する傳説が

(註四)

ある。殆んど永劫から永劫へ亘る時間を四期に分つて居る。第一期サトヤユガに於ては人類みな幸福長生絶えて不幸病患と云ふものが無い。

次の第二期トレータユガに至ると始めて人類の三分の一が墮落して壽命減じ、病氣が起る。次の第三期ドブーバラユガでは人類の半數が墮落して病氣に罹る。第四期カリユガは即ち現今の時代を含むので全人類が墮落して病氣も多くなつた。梵天はこの有様を憫んでこれを救済せんがためにアーユル吠陀を作つたのである。然しこのアーユル吠陀なるものは極めて浩瀚なもので末世澆季の人類の記憶力では到底傳ふるに堪へないそこで梵天は百頌づゝを一章とせるもの一千章即ち一萬頌のアーユル吠陀を省略短縮して八章となし記憶に便したものが即ち現今傳へられる醫方である。

この八章の醫方と云ふことは印度醫方の分科

印度の醫方及び藥物

であつて次の如きものを指すのである。

- (一) シャールヤタントラ、これは外科に關する處置療法を説く。
- (二) シヤールキヤタントラ、これは頸部、以上の疾病、眼科と耳鼻咽喉科を合併したやうなもの。
- (三) カーヤチキトサー、身體諸部分に關する疾患熱病、糖尿病等これは内科に相當する。
- (四) プフータヂヂヤ、これは惡魔等に魅かれた場合の療法、禁呪、祈禱、供物、藥物等を説く。云はゞ精神病科である。
- (五) クマールブフリトヤ、小兒の疾患及び處置、小兒科に相當する。
- (六) アガダントラ、解毒法、鑛物、植物、動物質の毒消し劑を取扱ふ。トキンコロシ毒物學である。
- (七) サヤーナタントラ、これは勢力回復、若返り法である。
- (八) プージカラナタントラ、これは生殖器の勢力

増進法である。

梵天はこのアーユル吠陀をダクシャブラジャーバタイに傳へた。次にダクシャブラジャーバタイはこれをアシユヰン雙生神に傳へた。アシユヰン雙生神は天界の醫者として有名であり、リグ吠陀讚歌の中にも彼等に捧げた讚歌が多い。以て吠陀時代の民族が如何に醫術に注意を拂ひ、これを尊重したかを想見することが出来る。

四

(註六)

リグ吠陀の中には驚くべき外科的手術が記録せられて居る。ダドファンチと言ふ一人の聖者がインドラから梵天の或る學問を學び得た。然し教はる時には誰にも他のものには教へぬと云ふ約束をした。若し其約束を破つたならば彼の頭を刎ねると云ふのであつた。所でアシユヰン兄弟は如何にもしてこれを習はんと遂に聖者

の首を斬つて馬の首を接いだ。而して術を習つた。インドラは約束を破つたことを知つて、聖者の頭を刎ねたが、それは恰も馬の首なので、アシユヰン兄弟は直ちに大切に保存してあつたもとの聖者の首を接いだ。この離れ業は神々の賞讃を博したが然したとひ何にもせよ師の首を刎ねると云ふことは甚だ宜しくないと云ふので神々の種族から破門せられた。而して供犠の式に與ふことを許されない。

所でチュヤヰナと云ふ聖者がある。年老いてはゐるが、シャルヤーテイ王の娘スカマヤー姫を娶つて元氣頗る旺盛である。このチュヤヰナをアシユヰン兄弟は若返らせてやつた。これはマハーブハーラタ(三)の一二二にも委して出てゐるが、チュヤヰナアヴレーハ(若返り法)として今に傳へられて居る。チュヤヰナは喜びの餘り供犠の壇上にソーマの一杯を飲む權利を認

めてやつた。然しインドラが来てこれを阻止し
チュヤヴナと争ひの結果チュヤヴナの頭上に雷
を落さんとしたが、チュヤヴナは少しも躁がず、
忽ちインドラの雙腕を癩れさせてしまった。然
しアシユヅインがこの癩癩を癒してやつたので
インドラも喜んで再びアシユヅイン兄弟を供儀
の仲間に加へることを承認すると云ふやうに見え
て居る。かく天界ではアシユヅインの醫方は有
名であり、遂にインドラはアシユヅインからこ
れを習ふに至つた。而してインドラはこれをそ
の弟子ブハラドヴージャに傳へ、ブハラドヴー
ジャは又これをアトレーヤに傳へた。

神話の領域は此に次第に人間界の消息と交渉
し來る。アトレーヤは六人の弟子にこれを傳へ
その六人の弟子の一人がアグニヅエーツヤでそ
のアグニヅエーツヤの醫方を傳へたものが即ち
チャラカである。チャラカの名は記憶せねばな

らぬ。チャラカサンヒターと云ふ醫書は印度最
古のものである。

又一方にインドラからドハヌヴンタリに傳は
り、ドハヌヴンタリからスシュルタへ傳へられ
たものがある。これは主として外科の醫方であ
つて、スシュルタサンヒターはチャラカサンヒ
ターに次いで古いものである。

又この他に佛典などに屢々出て來るジーワカ
即ち耆婆のことも忘れてはならぬ。釋尊時代に
印度には二個の大學があつた。一は東の方カー
シー即ち今のベナレス、一は北の方タクシラ即
ち現今のラワルビンデイ方面である。耆婆はタ
クシラ大學でアトレーヤに學んだと云ふことが
傳へられて居る。

五

次にヘルンレ圖書の中で印度の醫方に關する
古典の解説を簡單に叙べやう。

如何してもまづチャラカサンヒターに第一指

を屈せねばならぬ。チャラカサンヒターは現存

醫書の最も古いものである。これはチャカラと

云ふものがアグニヴェーシヤの醫方を輯録した

ものとなつて居る。年代は勿論確かなことは判

らぬが、凡そ紀元前六世紀頃の成立、紀元十一

世紀のチャクラバーニが註を書いて居るからそ

の頃に現形が成つたものと見て可い。チャラカ

自身はこの書を完成せずに歿したらしい。即ち

後の三分の一程はカピラバラの子ドリドハバラ

によつて補はれた。これが紀元後七八世紀の頃

である。このドリドハバラは勿論アグニヴェー

シヤの醫書を参考したらしい。尙このチャラカ

サンヒターには、ハリシユチャンドラバタンジャ

リ等の註もある。

ヘルンレ圖書の中ではチャラカサンヒターに

關係するものか八部ある。列擧すれば次の如く

である。冠首の數字は原簿の番號を示す。

57. Caraka Samhitā, 8 vols. ed. 1896. (Bibli-

theca Indica).

この一部八冊はヘルンレが自分の講讀用に製

本させたものらしい。各頁毎に白紙を一葉づゝ

挿入してゐるのは異本の校訂やら意見やらを記

入するためであらう。チャラカサンヒターは全

篇八品に分けられて居るが、その一品を一冊に

製本させてある。それでその中のチキトシタス

トハーナの一品の如きは非常に長いからこの一

冊は殊に厚くなつてゐる。

134. Caraka Samhitā, 2 vols. ed. 1896. (Bibli-

otheca Indica)

前出 57 と同種の一本ではあるが、多年講讀

の餘、手摺れ破損頗る甚しい。由て以て如何に

彼が苦心研究せしかを想見し得る。

132. Caraka Samhitā, 2nd edition, 1899. (Bibli-

第二版と特に記してある。多少訂正があるらしい。最後の一品シッドヒストハーナが缺如してゐる。

133. Caraka Samhita, 1st edition, 1877.

(Bibliotheca Indica)

これは初版である。比較研究の上には初版は頗る價値あるものとなる。

129. Caraka Samhita, ed D. & U. Nath Sen,

Calcutta, 1897.

これは別本の出版である。

143. Caraka Samhita, 2 vols.

これ亦別本の出版、ヒンデイの註釋が添えてある。

245. Caraka Samhita.

これも別本の出版、但しチキトシタストハーナとカルバストハーナの二品のみであつて、七

冊の假綴になつてゐるが後に一冊に製本させるつもりである。尙ほカルバストハーナの英譯が添えてある。

2. Nāgari Transcript of the Old Palm-leaf MS.
of the Caraka Samhita.

この一部はヘルンレが可なり大切にしておいたものだと云ふことが想像される。チャラカサンヒターの最後の三品チキトシタ、カルバ、シッドハをば古代貝葉の密本から謄寫させた一冊で、開卷の所に記されたのによると原本はチバルカータマンドウの王立圖書館にあり、これを特別に貸出の許可を得てハラブラサードシャーストリが謄寫させたのであつて二十五留比を仕拂つたことまで書いてある。尙ほ附屬の書類に依るとインデアオフィスの藏本を借り出して校訂がしてある。黄色の印度紙に極めて美しく書いた大冊の寫本である。

六

次にはスシユルタサンヒターを擧げねばならぬ。これは主として外科治療に關するもので、スシユルタがドハヌワンタリの醫方を傳へてチヤラカと同時代か若くは少し遅れて編成したと云ふことになつて居る。後半部にウツタラタントラと云ふものが添加されてゐるが、これはシヤーラキヤ即ち頸部以上の治療に關するもので、面白いことにはこの部分はナーガルジュナ即ち龍樹が書いたのだと註釋者の一人ダララナは云ふて居る。若しこのナーガルジュナを智度論などの龍樹と同一人であるとすれば頗る興味あることである。傳ふる所によれば龍樹は壯年時代極めて熱心に醫術を習ひ、或は翻身の法を學んで王の後宮に忍び入り宮女に戯れたと云ひ傳へられて居るから、この著作は有り得べからざることでは無い。

ヘルンレ圖書の中、スシユルタサンヒターに關するものは次の十二部である。

116. *Sūśruta Saṃhitā*, the system of Hindu Medicine taught by Dhanwantara. Calcutta, 1902.

ゾイドヤーサーガラ出版本であつて、次の117. に同じ。

117. *Sūśruta Saṃhitā*, the System of Hindu Medicine taught by Dhanwantara, Calcutta, 1909.

これは次前の116と全く同じ。

314. *Sūśruta Saṃhitā*.

これは不完全であつてチキトシタストハーナ迄あるのみ。

23. *Sūśruta Ayurveda*.

これはグジャラーティーにて註釋が施してある。

119. *Susruta Ayurveda Sastra*. 2vols. Calcutta, 1896. (Bibliotheca Indica.)

これは各頁に白紙を挿入した書き入れ本である。

274. *Susruta Samhitā*, ed. GanaPrasāda Sena.

この本は「ン」の字を以て出版せる一本である。

142. *Susruta Samhitā*.

この本は「ン」の字を以て出版せる。

118. An English Translation of the *Susruta Samhitā*, ed. & published by Kaviraj Kunja

Lal Bishagratana, 2vols. Calcutta, 1907.

これは英譯である全部三冊より成るのであるが、最後の二冊は生前の彼の手に入らなかつたものを見る。

395. *Susruta Samhitā*, Translated by Uday Chandit, 3vols. 1891. (Bibliotheca Indica.)

印度の醫方及び藥物

これは最初に試みられた英譯である。然しこれはヒンディー譯から作られたもので、直接サ

ンスクリットの原典から作られた譯でない。且つ最初の二冊を出せし後、譯者は不幸にして天

折した其の後何人かに依て第三冊が續いて譯

されたが、翻譯も十分でなく遂に中止するに至つた。かゝる事情であつたからヘルンレは更に新

に稿を起して次ぎの一譯に着手したのである。

384. *Susruta Samhitā*, Translated by A. F. R.

Hoernle, Vol. I. (Bibliotheca Indica.)

370. 前出 384 と同本である。

380. 前出 395 の第三冊である。

七

次にサンスクリット原典にしてヘルンレの蒐集したるものを出來得るだけ解説するとしよう尤もこの中にはヒンディー・ベンゴリー等の原典も含めて置く。

290. *Astāṅga Hridaya*, 2 vols. Bombay, 1880.

この書はブーグブハタの作、百二十章より成り、解剖學、藥用法、眼科學、産科學、衛生法を論せる醫方書の集録であつてアルナダッタの註釋を添えてある。

9. *Astāṅga Saṃgraha*. 2 vols.

この書も同じくブーグブハタの作、諸種の註釋がある。藥物を論ず。

256. *Bheda Saṃhitā*.

アトレーヤの六人の弟子の一の醫方であつて實に珍らしいもの且つこの書はカナラ書體で記された寫本でデーヴナーガリー字に寫し換えてある。多分ヘルンレが南印度あたりで謄寫させたものであらう。

279. *Rasa Hidayā Tattva*.

これより以下の十冊はみなボンベイ出版のアーユルヴェデーヤグラントハマーラー叢書

に屬するものである。これは第一卷でマダナキ

ラタ王の侍醫ブーヰンダブヒクシユの作、金屬類の藥品を製作する順序を述べたものである

93. *Rasa Prakāśa Sudhakara*.

西紀一五五〇年ヤシヨードハルの作、金屬藥

品の製法と用途とを述べたもの。

65. *Gada Nigraha*.

ブーイドヤシヨードハルの作。

199. *Rajamartanda. Nādi-parikṣā*.

この一冊には以上二部を收む。著作者年代未だ勘へず。

56. *Rasasara. Rasasanketakaika*.

この一冊も以上二部を收む。前者はブーヰンターチャーリヤの作、金屬藥品に關する論文。後者は未だ勘へず。

201 *Vaidya Manorama. Dhātū Kalpa*.

この一冊も以上二部を收む。前者はカーリダ

イサの作、後者はドハーラーカルバの作。

202. Rasayana Khanda.

著作者年代未だ勘へず。

192. Ayurveda Prakāśa.

マードンワの作、これにて叢書は完結してゐる。

241.

Rasa Hridaya Tantra.

この書は279に同じ。

326. 不完本。

312. Mādhava Nidāna.

これから以下の四部は診断法に關するもので

あつて、この書は西紀一三三一年のマードンワの

作。

276. Nidāna Jivānanda. Calcutta, 1902.

シーブーナンダの作。

234. Nidāna Vidya.

未だ勘へず。

印度の醫方及び藥物

126. Nidāna. Calcutta, 1880.

ウドーイチャンドダットの譯、ベンゴリーに翻譯せしもの。

296. Cakradatta, D. Sen and U. Sen.

チャクラバーニの作、諸種の疾患に適用すべき藥物を論せしもの。ベンゴリーにて記してある。

269. Hitopadeśa.

印度文學に有名な同名の物語があるが、これ

は全くそれとは異なり、シュリーカントハサン

ブフの作、食養生及び普通疾病に關する諸種の

論議を載せて居る。

385. Śūrya Siddhānta.

未だ勘へず。

247. Rasa Ratna Samuccaya.

ヌリバシンハグブタの子ブハッターチャール

ヤの作、金屬礦物の調劑準備を論せしもの。

211. Sannyasinate Ayurveda Samgraha. Calcutta,

1882.

ブフバナチャンドラヴーサカの作、藥物を論

せしもの。

169. Vaidya Jivana.

西紀一六三三年のローリンブラジャの作、物

理學の應用に關する小論文。

161. Bhavaprakāśa.

西紀一五五〇年のブハヴァシシュラの作、藥物

に關する印度の著作の有名なるものを集成した

るもので全印度に亘り醫家の最も親災せる書物

である。ミンゴリー譯である。

148. Bhaisajya Ratnavali.

ゴーズインダダスの作、物理學の應用に關す

るもの。ヘンティの註釋を添えてある。

140. Vangasena Samhita. 2 vols.

ブンガの作、金屬の藥品の準備用法及び一般

疾病に關して述べたるもの。この書はヒンディ

ーの原典に註釋を添加してある。頗る古代のも

のであることである。

130. Resendra Cintamani. Rasaratnakara.

Calcutta, 1878.

金屬藥物によつて疾病を處置することを論せ

しもの。前者はラーマチャンドラグハの作、後

者はニトヤーナンダシッドハの作。

110. Rasajnavam. Calcutta, 1910. (Bibliotheca

Indica).

次下の423に同じ。金屬藥品の處置を論せし

もの。

423. Rasajnavam.

次上の110に同じ。不完本である。

83. Śaṅgadhara Samhita. ed. Prabhuram Jivar-

am. 1891.

シャルンガドハラの作、病理學及藥物の應

用を論ず。次下と同じ。

281. Śārngadhara Samhitā. 次上と同じ。

313. Siddhamantra.

未だ勸へず。

289. Nibandha Saṅgraha.

マリナの作。

255. Vanasadhī Darpana. Calcutta, 1908.

ラジエブイグヤシーチェンハの作。

235. Vaisyavansāvibhūṣana.

未だ勸へず。

28. Pratyakṣacaritam.

未だ勸へず。

17. Rājānighanta. Dhanvantarinighanta. Poona,

1896.

薬物を説ける二論文。

16. Vindanādhava or Siddhayoga of Śrīmat

Vindamuni. Poona, 1894.

印度の醫方及び藥物

未だ勸へず。

13. Jvara Cikitsā & Bhaisajyopakramanīya.

これはチェンハの梵本を寫眞に撮影したる一

本である。

八

以下論文で記された書籍數部を擧げる。

275. Commentary on the Hindu System of Me-

dicine.

T. A. Wise. London, 1860.

273. Medicine of Ancient India. Part I. Osteology.

A. F. R. Hoernle. Oxford, 1907.

243. The Ayurvedic System of Medicine. Sumant

B. Mehta. Ahmedabad, 1913.

185. History of Aryan Medical Science. H. H.

Bhagvat Sinh Jee, London, 1896.

156. Beiträge zur Kenntnis der tibetischen Me-

dicin von Heinrich Laufer, 2 vols. Berlin

1900.

124. Materia Medica of the Hindus. Uday Chand

Dutt. Calcutta, 1900.

102. The Surgical Instruments for the Hindus
2 vols.

G. Mukhopadhyaya. Calcutta University,
1913.

88. Medicin von Julius Jolly. Strassburg, 1901.

138. The Bower MSS. A.F. R. Hoernle. 3 vols.
Calcutta, 1893-1912.

九

予はこの稿を舐するに當つて、以上の解説に續いて、印度醫方の根本原理、藥物の一般、鑛物藥殊に水銀劑の製法、印度人の衛生法、婦人に關する攝生法等を記述する豫定であつたが、匆忙意に任せぬ爲めこれは後日更に稿を改めることゝなし一先づこの編を了ることゝする。

(註一) 法隆寺貝葉に就ては牛津紀要の古代貝葉及び日本發見の佛教梵經等參照。

(註二) 四種吠陀の中、アトハルヴ吠陀は比較的後代の成立に屬す。故に古典の中では四吠陀よりは寧ろ三吠陀として數々擧げてある場合が多い。

(註三) ウバ吠陀の四種とは、(一)アーユル吠陀醫方藥物に關するもの、リグ吠陀より出づ。(二)ドハヌル吠陀戰法武器のこゝを論ず。ヤシユル吠陀より出づ。(三)ガインドハルヴ吠陀、音樂に關するもの、サーマ吠陀より出づ。(四)ストハーパーヤシヤーストラ吠陀、工藝に關するもの、アトハルヴ吠陀より出づ。

(註四) 佛教に方ける正像末の三時、或は成住壞空の四時期の傳説を比較せよ。

(註五) このこゝは華嚴經や大日經に伴ふ廣略三本の傳説と同一系である。

(註六) 其他神々を阿修羅との戰闘に於て足を傷けたもの、ために鐵の足を接いでやることが見え、眼を傷けたものに義眼を與へること見えて居る。戰士の身體に立つた箭は巧みに抜き取られ、速かに繙帶せられることも見えて居る。又アシユグインはプーシヤンに新しい齒を、プハーガデーヅに新しい眼を與へ、チャンドラマスは肺病を癒したと傳へられる。

(註七) 六人の弟子は(一)アグニグエーシヤ(二)アヘーダ(三)シャーツカルナ(四)バラシヤラ(五)クシラバーニ(六)ハリータである。